

Rather than に続く動詞の形

阿戸 昌彦
(Masahiko Ado)

1. はじめに

Rather than という表現は, (1) に見られるように, 等位接続詞として2つの形容詞句, 副詞句, 名詞句を結び付ける。

- (1)a. I'd call her hair chestnut rather than brown.
- b. I'd prefer to go in August rather than in July.
- c. We ought to invest in machinery rather than buildings.

(Swan 2005: 474)

動詞句もまた, rather than によって結び付けられる。

- (2)a. They were screaming rather than singing.
- b. She telephoned rather than wrote.
- c. He wanted to sunbathe rather than (to) swim.

(Quirk et al. 1985: 1003)

等位構造であれば, 先行する動詞の形式と rather than に後続する動詞の形式が同じであることが予測され, (2a,b)ではそのようになっている。しかし, (2c)にみられるように, 先行する動詞の形が to 不定詞であるときに, rather than の後ろの動詞が原形不定詞の形で現れることがよく知られている。Jespersen (*MEG V*) や Curme

(1931) といった 20 世紀初期の文法書にも, *rather than* と *sooner than* の後ろでは原形不定詞をとる傾向があることが述べられており, 伝統文法のころから知られてきた事実である。

(3)a. He ought to have come by steerage rather than not [to] have started.

(Curme 1931:305)

b. I was solicited by my wife to submit to any condition rather than remain here.

(Jespersen *MEG* V:186)

一方で, *rather than* に後続する動詞の形として, 先行する動詞の形にかかわらず, 原形不定詞と並んで, -ing 形 (V-ing) が用いられることが記述されるようになってきている。

(4)a. I decided to write rather than phone / phoning.

(Swan 2005:474)

b. Let's tell her the bad news now rather than risk / risking her hearing it from somebody else.

(Declerck 1991:491)

Quirk et al. (1985) や Biber et al. (1999) では, 従属接続詞としての *rather than* としたうえで, 原形不定詞と V-ing の例を挙げている。

(5)a. Rather than cause trouble, I'm going to forget the whole affair.

(Quirk et al. 1985:982)

b. Their actions precipitated the war rather than averting it. (op. cit.:1006)

(6)a. Planners working on Santa Cruz's 15-year general plan are recommending the city build more condominiums and apartments in urban areas rather than sacrifice rural open spaces.

b. In the meantime it might be worthwhile to spend more time thinking how we might build humans into systems rather than designing them out in the pursuit of technical advances.

(Biber et al. 1999:819)

このような記述の変化は、およそこの 100 年の間に、rather than の働きやそれに後続する動詞の形に変化が生じてきていることを示している。本小論は、19 世紀および 20 世紀の英語を扱った大規模コーパスを用いて事実観察を行い、rather than に後続する動詞がとる形の推移を明らかにすることを主たる目的とする。また、原形不定詞と V-ing が生起することの要因について考察をする。

2. Rather than + 原形不定詞・V-ing の頻度

2. 1 現代の英語と 19 世紀から 20 世紀初頭の英語

現代の英語で rather than に後続する位置で原形不定詞と V-ing が、それぞれどの程度出現しているのかを比較しておくことにする。コーパスとして現代のアメリカ英語には The Corpus of Contemporary American English (COCA) を、イギリス英語には The British National Corpus (BNC) を用いた。¹ 検索文字列を “rather than [v?i*]” と “rather than [v?g*]” とし、それぞれ原形不定詞、V-ing を伴う例を取り出した。

2

(7)	原形不定詞	V-ing
COCA	10,748 (45.8%)	12,717 (54.2%)
BNC	2,470 (51.3%)	2,348 (48.7%)

COCA では V-ing が、BNC では原形不定詞がそれぞれ上回っているが、どちらかが極端に高い割合で現れているということはない。現代の英語では、英米を問わず、rather than に後続する動詞はどちらの形も生じうるようである。しかし、先に述べたように、20 世紀初頭の文法書では原形不定詞が用いられるとされ、V-ing についての記載は見られなかった。当時の英語では rather than に後続して V-ing が現れることはなかったことを明らかにしておかねばならない。

1810 年代から 1910 年代のアメリカ英語として The Corpus of Historical American English (COHA) を、1780 年から 1920 年のイギリス英語・アメリカ英語として The Corpus of Late Modern English Texts, version 3.0 (CLMET3.0) を用いて検索をした。³ COHA は COCA、BNC と同じ文字列で検索した。CLMET3.0 は “rather than” で検索をして得られた 2,647 例すべてから該当するものを目視で数え上げた。

(8)		原形不定詞	V-ing
	COHA	2,577 (89.5%)	301 (10.5%)
	CLMET3.0	427 (89.5%)	50 (10.5%)

2つのコーパスの規模が異なるために検出データの数に違いはあるが、ほぼ同じ時代を調査して、原形不定詞が90%ほど、V-ingが10%ほどである点では一致している。このことから、19世紀から20世紀初めにおいて、rather than に後続する位置に生起する動詞は(9)のように原形不定詞が典型であったことがわかる。⁴

- (9)a. Then say to him that I sought death rather than be given to Don Felipe or to any one else. (COHA 1903)
- b. I would have died rather than let the Professor know I had seen it. (COHA 1917)

20世紀初めまでの英語と現代の英語を比較することで、rather than に後続する動詞の形として V-ing が生ずる割合がここ100年ほどの間に増加してきていることが明らかになった。

2. 2 V-ing 増加の時期

Rather than に後続する動詞の形として V-ing が増えてきた時期を検証する。

COHA を用いてアメリカ英語における rather than + V-ing の推移を調査した。表1はその検出データ数と100万語あたりの頻度を表したものである。1810年代から徐々に頻度が高まり、1950年代あたりから急激に高まってきていることが見て取れる。

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
FREQ	1	14	18	19	23	21	27	32	33	38	41	66	78	82	142	171	269	318	550	507
PER M L	0.85	2.02	1.31	1.18	1.4	1.23	1.45	1.58	1.6	1.72	1.81	2.57	3.17	3.37	5.79	7.13	11.3	12.56	19.68	17.15

表1 COHA における rather than V-ing の推移

イギリス英語について COHA と同様のコーパスがいまだ公開されていないため、LOB コーパスの系列の 4 つのコーパスを利用して推移をみることにする。BLOB は 1931 年、LOB は 1961 年、FLOB は 1991 年、BE06 は 2003-2008 年のイギリス英語のコーパスで、それぞれ約 100 万語の規模となっている。⁵ これらは、ほぼ同規模、同ジャンルの英語で構成されており、検出されるデータの数から、およそ 30 年ごとの推移を知ることができる。“rather than +ing” で検索し、無関係なものを取り除く作業をした。

	BLOB	LOB	FLOB	BE06
FREQ	3	2	21	30
PER MIL	2.58	1.75	18.37	26.15

表2 イギリス英語における rather than に続く V-ing の推移

- (10) ...of Lindsay 's work, anticipating the Heptameron of eight years later rather than looking back to the romance. (BLOG37)

1931 年にも(10)のような例はあるが、BLOB と LOB で 1 桁台であった V-ing の 100 万語あたりの頻度が、FLOB では大幅に高くなっている。イギリス英語においても 1960 年代以降急速に V-ing が生起するようになってきたことが明らかである。

このことは The Google Books Ngram Viewer においても確かめることができる。⁶ COCA でも BNC でも rather than V-ing に最も多く生起する動詞は be なのであるが、その頻度の推移をグラフとしてみることもできる。⁷

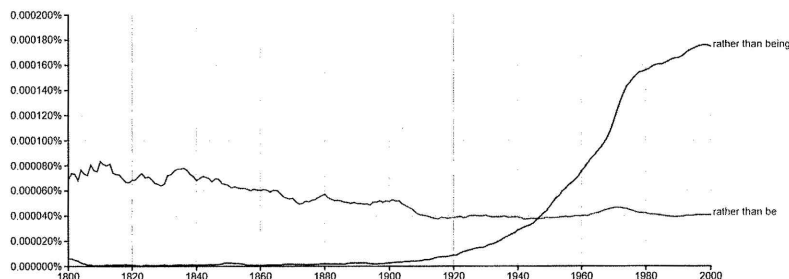


図1 rather than be/being の推移: The Google Books Ngram Viewer (American English)

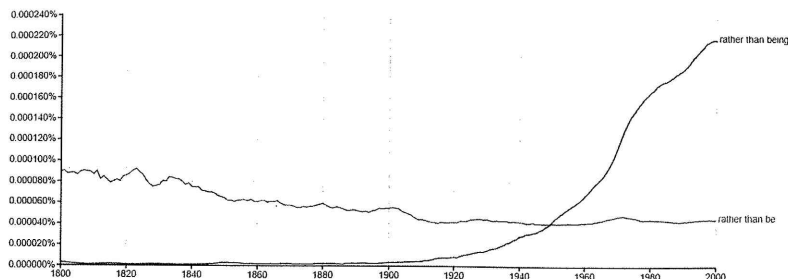


図2 rather than be/being の推移: The Google Books Ngram Viewer (British English)

COHA や 4 つの LOB 系コーパスなど個別のコーパスとの単純な比較はできないのであるが、アメリカ英語でもイギリス英語でもほぼ同じ頻度の推移を示していることがわかる。原形不定詞 be の頻度が比較的横ばい、微減であるのに対して、19 世紀にはほとんど見られなかった being が 20 世紀に入って増加し始め、1940 年を過ぎたあたりから急に頻度が上がっている。頻度の上では 1950 年ごろには逆転していることがわかる。

3 考察

Rather than に後続する動詞が 20 世紀初めには原形不定詞が典型で、現在は原形不定詞と V-ing がほぼ同程度に生起するようになってきたことを見た。本節では、文頭に前置された従属接続詞としての rather than に後続する位置に絞って、なぜ、動詞の形に変化が生じてきたのかを考察する。等位構造と異なり、先行する動詞の形の影響を受けることなく、rather than との関わりのみで動詞の形が決まる環境での調査することができる。

3.1 従属接続詞としての rather than

現代の英語では、rather than は等位接続詞と従属接続詞の 2 通りの働きをする (cf. Quirk et al. (1985:1004), Huddleston and Pullum (2002:1317)).⁸ 等位接続の “X rather than Y” は “X, not Y (Y ではなく X)” という意味になるという。

(11)a. In the end he survives rather than conquers.

b. The dilemma has deepened rather than been resolved.

(Huddleston and Pullum 2002:1317)

(11) はそれぞれ定形の動詞句、完了形の過去分詞どうしを等位接続している。(11b) にこの解釈を当てはめれば、「ジレンマは解決したのではなく、深くなった」となる。Rather than に結ばれた2つの動詞が同じ形に活用していることに注意されたい。また、例は示していないが、これら等位接続の“rather than Y”は前置することができないとしている。

従属接続詞としての rather than は、“preference (選択)”を表し、“in preference to (～よりむしろ)”の意味で、従属節を導く。(12),(13)に見られるように、rather than に後続する動詞は、主節の動詞と形が一致せずともよいとされ、また、rather than 以下を前置することが可能となる。

(12)a. They obeyed the order rather than suffer torture or death.

b. Rather than suffer torture or death, they obeyed the order.

(Huddleston and Pullum 2002:1317)

(13) Rather than go there by air, I'd take the slowest train. (Quirk et al. 1985:1111)

従属接続詞としての rather than の特徴として、主節動詞と rather than の後ろの動詞の形の不一致が挙げられていることに注意されたい。20世紀初めの用法では、(14)のように、主節のto不定詞に対して rather than の後ろで原形不定詞が生起する等位接続構造があった。Jespersen (MEG V:186) はこのような例が頻繁に用いられ、先行する動詞がto不定詞でない場合にも(15)のように原形不定詞が用いられるようになったとしている。

(14) I was solicited by my wife to submit to any condition rather than remain here

(= 3a)

(15)a. they had died in torments rather than sacrifice to Serapis

b. she was prepared for final parting from her husband rather than try to effect that change

(Jespersen MEG V: 186)

しかし、等位構造としては先行する動詞と形が異なる原形不定詞が **rather than** に後続するのは不自然である。そのような認識が生じたとき、先行する動詞と **rather than** の後ろの動詞の形が一致しない場合に **rather than** を従属接続詞と解釈するようになったと推測される。従属接続詞と解釈されるようになると、等位構造では許されなかった **rather than** 節の文頭への前置が可能となる。

3. 2 文頭の **rather than** に続く動詞の形

文頭に前置されていれば **rather than** の働きを従属接続詞に限定することができる。この環境で“**rather than** (+動詞)”の推移を調査すると、少なくとも文頭に生起する **rather than** 従属節の特徴の一つが明らかになる。COHA で検索文字列を“and/but/so/. **rather than** [v*]”と“and/but/so/. **rather than**”とした結果を示す。⁹

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
+ V	5	6	12	18	17	15	19	19	15	19	22	34	29	33	49	84	101	143	252	246
PER M L	4.23	0.87	0.87	1.12	1.03	0.88	1.02	0.94	0.73	0.86	0.97	1.33	1.18	1.36	2	3.5	4.24	5.65	9.02	8.32
ALL	5	6	16	27	24	19	23	26	17	25	31	40	36	45	57	98	116	175	304	287
PER M L	4.23	0.87	1.16	1.68	1.46	1.11	1.24	1.28	0.83	1.13	1.37	1.56	1.46	1.85	2.32	4.09	4.87	6.91	10.88	9.71
	100%	100%	75.0%	66.7%	70.8%	78.9%	82.6%	73.1%	88.2%	76.0%	71.0%	85.0%	80.6%	73.3%	86.0%	85.7%	87.1%	81.7%	83.0%	85.7%

表 3.1 文頭に生起する **rather than** (+動詞) : COHA

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
+ V	23	158	254	348	381	329	434	413	357	435	418	493	469	483	594	691	803	878	1,229	1,118
PER M L	19.47	22.81	18.44	21.68	23.13	19.29	23.38	20.33	17.33	19.69	18.41	19.22	19.06	19.84	24.2	28.82	33.72	34.68	43.98	37.81
ALL	78	491	948	1,149	1,317	1,188	1,351	1,458	1,485	1,776	1,944	2,216	2,055	2,127	2,452	2,674	2,788	2,959	3,587	2,964
PER M L	66.03	70.88	68.82	71.6	79.96	69.66	72.78	71.77	72.08	80.37	85.64	86.38	83.53	87.36	99.9	111.52	117.07	116.88	128.38	100.25
	29.5%	32.2%	26.8%	30.3%	28.9%	27.7%	32.1%	28.3%	24.0%	24.5%	21.5%	22.2%	22.8%	22.7%	24.2%	25.6%	28.2%	29.6%	34.2%	37.7%

表 3.2 **rather than** (+動詞) : COHA

表 3.1, 3.2 の最終行は **rather than** 節全体における“**rather than** + 動詞”の割合を示している。従属節として文頭に前置される場合、動詞が後続する割合がほぼ 80%となっている。特に、1810 年代、1820 年代は、データ数は少ないものの、すべて動詞が後続している。これに対し、**rather than** 全体では 30%に満たない程度である。“**Rather than** + 動詞”になることが非常に多いことは、文頭に生起する **rather than** 従属節の大きな特徴といえる。このことは、以下でみるように、**rather than** 従属節に生起する動詞の形の推移に関わりがあると思われる。

文頭の **rather than** 従属節に生起する動詞の形の推移を表す検索結果を、アメリカ英語 (COHA) について表 4.1, 4.2 に、イギリス英語 (LOB 系の 4 コーパス) について表 4.3 に示す。

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
FREQ	5	5	11	16	15	15	17	14	15	17	20	27	26	26	41	63	55	83	130	132
PERM L	4.23	0.72	0.8	1	0.91	0.88	0.92	0.69	0.73	0.77	0.88	1.05	1.06	1.07	1.67	2.63	2.31	3.28	4.65	4.46

表 4.1 文頭の **rather than** に後続する原形不定詞 : COHA

	BLOB	LOB	FLOB	BE06
原形不定詞	2 (100%)	2 (66.7%)	5 (67.5%)	6 (42.9%)
Ving	0 (0%)	1 (33.3%)	3 (32.5%)	8 (57.1%)

表 4.2 文頭の **rather than** に後続する V-ing : COHA

	1810	1820	1830	1840	1850	1860	1870	1880	1890	1900	1910	1920	1930	1940	1950	1960	1970	1980	1990	2000
FREQ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	1	2	4	7	18	41	58	120	112
PERM L	0	0	0	0	0.06	0	0	0	0	0.05	0	0.04	0.08	0.16	0.29	0.75	1.72	2.29	4.29	3.79

表 4.3 文頭の **rather than** に続く原形不定詞・V-ing : LOB 系の 4 コーパス

アメリカ英語では、19 世紀中はそのほとんどが原形不定詞で、**V-ing** が生じるようになるのは 20 世紀になってからである。データ数が少ないため、はっきりとしたことは言えないが、イギリス英語でも、20 世紀初めは原形不定詞しかなく、近年 **V-ing** が増えてきている。

文頭の **rather than** 従属節に生起する動詞の形（原形不定詞と **V-ing**）の推移を明らかにした。では、なぜ、はじめは原形不定詞しかなかったのかということについて考えてみたい。

この事実には、どういう場合に **rather than** が従属接続詞と解釈されるようになったかということが関係していると思われる。表 3.1 で見たように、1820 年代までは文頭の **rather than** 従属節はすべて動詞が生じているものであった。動詞が後続したときのみ **rather than** が従属接続詞と解釈され、前置されるようになったということである。20 世紀初め頃までは、等位接続詞の **rather than** に後続する動詞の

形として、先行する動詞と異なる形式(原形不定詞)で現れる状況が存在していた。これは、等位構造としては不自然なものである。この不自然さを解消しようとする力が働き、**rather than** を従属接続詞として解釈する変化が生じたものと推測される。“**Rather than** + 原形不定詞”の形である場合に従属接続詞と解釈されるようになったのであるから、文頭へ前置されるものも初めは原形不定詞を含むものだけであつたと考えてよいであろう。

次に、なぜ **V-ing** が生じるようになったのかを考える。Huddleston and Pullum (2002:1317) は従属接続詞の **rather than** は **rather** が主要部であるとする。等位構造では **rather than** は一つの複合接続詞であつたが、主要部 **rather** と非主要部 **than** に分かれたものと認識されるようになったということになる。独立した **than** は前置詞として、19 世紀初頭の英語でも、現在の英語でも名詞句を目的語にとる。

(16)a. For ages ne'er could one have prov'd More lovely than the rest. (COHA 1813)

b. Sometimes the oxen pulled two-wheeled carts whose wheels were taller than a man. (COHA 1993)

従属接続詞と解釈されるとき、(rather) **than** に後続するものが動詞であることから、**than** に後続する目的語となる形、つまり、**V-ing** となつたと考えられる。

(17)a. “Teachers are spending more time proving they're doing their jobs than being allowed to do them, and students are spending more time proving they can pass a standardized test than being given time to truly master the content,” Avossa wrote. (COCA 2015)

b. Not having prior knowledge was also more likely to lead to a correct response than having prior knowledge. (COCA 2014)

(下線部は筆者による)

前置詞 **than** の目的語になる形式として **V-ing** が生じるようになったとすると、それがなぜ 20 世紀になってからなのか、なぜ 1950 年代以降急激に増加してきているのかを説明しなくてはならない。文頭の **rather than** 従属節における動詞の形を決

める要因は少なくとも2つある。そもそも *rather than* が従属接続詞と解釈されるには動詞が原形不定詞であるということと、*than* が独立した前置詞とみなされ名詞句を要求するということである。V-ing が増加してきているのは、まさにここ 100 年で進行中の変化である。後者の要因、すなわち、*than* を独立した前置詞と見なすことの影響力が高まってきて、V-ing と共に用いることが増えてきているのではないかと考える。

4. おわりに

本小論では *rather than* に後続する動詞の形の推移を 19 世紀から 20 世紀の大規模コーパスで調査し、初めは原形不定詞が典型であったが、現在では原形不定詞と V-ing がほぼ同じ頻度で生じていることを明らかにした。調査対象を *rather than* が文頭に前置された *rather than* 従属節に絞って調査し、初めは原形不定詞だけであったが、V-ing の頻度が高まっていることを明らかにし、その理由を考察した。

文頭への前置の例も含めて *rather than* 従属節のすべてを扱えたわけではないが、おおよその傾向に間違いはないと思われる。等位接続詞の *rather than* に後続する動詞にも、V-ing が増えているとすれば、従属接続からの類推によるものであろう。変化の途中にある現象であり、おそらく V-ing がより多く用いられるようになると予測はするのであるが、今後も観察を続けていかねばならない。

注

1 COCA は Brigham Young 大学 Mark Davies が Web で公開している現代アメリカ英語約 5 億 2 千万語のコーパスである。BNC はここでは、同氏が公開している BYU-BNC を利用した。約 1 億語の現代イギリス英語のコーパスである。それぞれ <http://corpus.byu.edu/> からアクセス可能である。

2 ここでは原形不定詞どうし、V-ing どうしが *rather than* によって結び付けられているものもすべて含めた単純な数値の比較であることに注意しておきたい。）

3 COHA は Brigham Young 大学 Mark Davies が Web で公開している 1810 年代から 2000 年代までのアメリカ英語約 4 億語のコーパスである。CLMET3.0 は Leuven 大学の De Smet が公開している 1780-1920 年の英米語約 2500 万語のコーパスである。おおよその年代をそろ

えるために、ここでは COHA について 1920 年代までを対象とした。

4 等位構造(V-ing rather than V-ing)であれば、V-ing が生じることは何ら不思議ではない。

(i) It was some months now since the disease had first appeared, and it was increasing rather than diminishing. (COHA 1895)

5 これら 4 つのコーパスは Lancaster 大学が Web 上で公開している CQP 版を利用した。

<https://cqpweb.lancs.ac.uk/> からアクセスできる。

6 <https://books.google.com/ngrams> からアクセスできる。

7 COCA では be 1,254 例, have 710 例, try 543 例, BNC では be 379 例, have 160 例, try 95 例がそれぞれ上位 3 位までに多く検出される動詞である。

8 Quirk et al. (1985:761) は, rather than を前置詞とし, 等位接続詞の働きをしている quasi-coordinator (疑似等位接続詞) という呼び方をしている。

9 より正確には, rather than の直前が “?” “!” “” (クォーテーションマーク)” である場合や埋め込み節の中も調査すべきである。本小論では扱えていないが, 生起する動詞の形の移り変わりについて, その傾向は十分に示すことができていると思われる。

参考文献

- Biber, Douglas, Stig Johansson, Geoffrey Leech, Susan Conrad and Edward Finegan. 1999. *Longman Grammar of Spoken and Written English*. London: Longman.
- Curme, George O. 1931. *Syntax: A grammar of the English Language*, Boston: D.C. Heath and Company.
- Declerck, Renaat. 1991. *A Comprehensive Descriptive Grammar of English*. Tokyo: Kaitakusha.
- Huddleston, Rodney and Geoffrey K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Jespersen, Otto. 1949. *A Modern English Grammar on Historical Principles*, Part V, London: George Allen & Unwin.
- Quirk, Randolph, Sidney Greenbaum, Geoffrey Leech and Jan Svartvik. 1985. *A Comprehensive Grammar of the English Language*. London: Longman.
- Swan, Michael. 2005. *Practical English Usage* 3rd Edition, Oxford: Oxford University Press.

コーパス・その他

BE06: British English 2006

BLOB: Lancaster 1931 Corpus

BNC: The British National Corpus

CLMET3.0: The Corpus of Late Modern English Texts, version 3.0

COCA: The Corpus of Contemporary American English

COHA: The Corpus of Historical American English

FLOB: Freiburg-LOB Corpus

LOB: Lancaster-Oslo/Bergen Corpus of British English

The Google Books Ngram Viewer

(東京学芸大学 講師)